MOYO CHILDREN CENTRE

モヨ通信 9号

発行人／松下照美（モヨ・チルドレン・センター主宰）　編集人／加藤英子・高橋優香　2006 年 10 月 10 日発行

リハビリテイション・スクールに入った 3 人の子ども

今年の7月から9月にかけて、ケヴィン・ムゴ（12才）、ジョセフ・ムトゥリ（11才）、ジョセフ・カラノ（13才）の3人のストリート・チルドレンを、ナイロビのリハビリテイション・スクールに送りました。

リハビリテイション・スクール（或いはセンター）とは、法律や社会規範に反した15才以下の子どもたちを収容し更生させるための施設で、

①犯罪に関わったり、路上に住んでいたため警官に逮捕され、留置場→裁判所を経て入所する場合

②保護者が子ども省の担当官と協議の上入所を申請、裁判所の審判を経て入所する場合の二つがあります。その他に、ただ孤児になって、世話をしてくれる親戚や入れる孤児院等が見つからなかった場合にも入所が認められることがあるようです。

収容期間は3年までで、18才（成人）になると出なくてはいけません。ケニアには国立のリハビリテイション・スクールが11ヵ所あって、そのうち2ヵ所が女子用、9ヵ所が男子用で、1つがティカにあります。

ストリートで生活する子どもたちは、この更生施設を「approved（少年院の意味）」と呼び、とても怖れています。「子どものための刑務所」をイメージし、そこに入れられると働かされ、ぶたれ、食事も十分に与えられず、寝るのも雑魚寝、不潔で、病気になっても治療もして貰えない等々、とても怖い所だと思っているようです。

先日私は 2 人の子どもたちを連れてその施設の一つを訪ねてみました。そこは清潔で、子どもたちも生き生きしていて一般の寄宿学校と変らない印象でした。ただ後で聞いた話だと各施設の運営には色々違いがあるようです。比較的ゆるやかな運営をしている所もあれば、とても厳しい施設もあるというふうに。

さて、文頭の 3 人がそこに入所することになったいきさつですが、モヨがストリートの子どもたちのリハビリに関わって以来、「新しい家」へ入ったり、家庭・学校へ復帰したりと、それぞれに落ち着いた子どもたちがいる一方、どうしてもシンナー・大麻・タバコ・コカイン等ドラッグを止められず、路上生活から抜け出られない子どもたちも多くいます。いつも泥酔状態で目に見えて身体が衰弱していく子も見かけます。路上生活が長くなればなるほど対処は難しくなります。

シンナーを放せず、いくつかの NGO を渡り歩き、警察に逮捕されることにも慣れていく子どもたちを前に無力感に苛まれることも度々です。そういう子どもたちに「あなたはどうしたいのか？　私たちはあなたに何をしてあげられるのか？」と問いかけ続けるのですが、なかなか明確な答えは帰ってきません。彼らもどうしたいのかが見えてこないのだろうと思います。

そういう状況の中で、「リハビリテイション・スクール」が一つの選択肢として浮上してきました。このまま路上で薬に侵されていくより、施設へ入れて拘束してでも薬を断たせたほうがよいのでは、と思ったのです。まずモヨの役員・スタッフと相談しました。そして本人に説明して考えさせ、同意が取れれば保護者と面談し、子ども省の担当官の助言も得て決定しました。その途中で気持ちが変わりいなくなる子、裁判への保護者の欠席、担当官のミス等に振り回されもしました。でもそれ以上に、他の子どもたちから、まるで「モヨはあの子を見捨てようとしている」と非難され、大きく心が揺るぎました。施設の実態をしっかり把握できないままの苦渋の選択でした。

入所手続きの間、子どもたちには「新しい家」で待って貰いました。入所する前に少しでもドラッグから遠ざけたかったからです。最終的に7月にケヴィン、8月にムトゥリ、9月にカラノをナイロビのリハビリテイション・スクールに送り届けました。

最低1ヶ月に1度は訪ねることを約束し、実行しています。今のところ 3 人とも元気でやっていますが、前回訪ねた時の一番小さいムトゥリの泣きべそをかいたような姿が目に焼きついています。3ヵ月後に各地へ分散させられるのですが、3人共ティカへの入所を申請するよう保護者に勧めたいと思っています。そうすれば頻繁に訪ねられるし、様子も掴み易いからです。

見守ることしか出来ないけれど、今後も共に歩んでいきたいとの思いで一杯です。　**松下**

「新しい家」の子どもたち

9名の子どもたちと「次郎」と―

新しくスティーブン（Stephen Irungu 11才・通称ビボー・5月9日入所）とブグワ（Joseph Nbugua・13才・9月11日入所）が加わり、「新しい家」の子どもたちは9名になりました。「新しい家」のベッド数は8ベッドなのですが、普段は大きい子ども二人が高校の寄宿舎に入っているので、新しく二人が加わっても、ケアテイカーを容れて8名が各自のベッドに寝られます。ただ長期のホリデイで大きい二人が帰ってくると、小さい子どもたちが二人ずつ寝ることになります。時々緊急処置的に短期に子どもたちを預かる時もあるのですが、そういう時も子どもたち同士で相談してベッドのやりくりをしてくれています。

さて新しく加わったスティーブンは他の子どもたちの通うキボコ小学校4年生に編入、おねしょ癖こそ続いているけれど、嘘をつく癖？と怠け癖？は少しずつ少なくなりました。つい最近加わったブグワは1年生に編入、学校へも家へも本当にすんなりと溶け込みました。自分自身がシンナーを吸うのはもちろん、時にはそれを売ってお金を稼いでいたとはとても想像出来ません。まだ声変わりしていない高い声、走る姿がまるで女の子のようでついつい笑ってしまいます。

二人とも複雑な家庭環境を経て「新しい家」の一員になったのですが、元気に育って欲しいものです。

さて、「新しい家」の子どもたちの近況です。

4月10日―待望の子犬（雄）購入―75シル（約125円）―子どもたちが「次郎」と命名（ちなみに我が家の犬は「太郎」）。以前、日本の昔の命名の習慣を話したのを憶えていた由。一度子どもの不注意で次郎が足を捻挫、慌てて獣医へ連れて行ったものの大したことはなく、ホットひと安心。でも驚いたのは治療費の高さ！子どもたちも口をアングリ。それからは次郎に対する扱いが慎重になったよう。夜は放して番犬役。よく吠えてくれるとか。

7月22日―日本大使館での小林茂監督・吉田泰三助監督（6月23日よりモヨ滞在・撮影中）製作の「わたしの季節」上映会に参加―当日は早朝からお弁当の準備、借り切った14人乗りのマタツと私の車の二台でキボコを出発したのが午前11時30分。参加者は「新しい家」の子どもたち・スタッフ・小林監督・吉田カメラマン・私プラス「モヨ・ハンディキャップ・グループ」から2名「ケニア知的障害者協会・ティカ支部」の方2人の総勢19名。途中ナイロビの中心にある「ウフル公園」で昼食、気分はまるでピクニック。

会場の日本大使館は今年4月にオープンしたばかりの新大使館、ボディチェックを受ける子どもたちは少々緊張気味。多くの参加者に混じりいよいよ映画が始まる。心配していたような騒ぎもなくみんな映画に集中、時には笑い、時には首を傾げながらも最後まで観賞。帰りはケニアでの支援者の方に頂いたお菓子とジュースを頂きながらティカへ。子どもたちの感想は「おもしろかった！」「～さんの様子がとてもおかしかった！」「日本人って皆あんな様子なの？」と色々。その後スタジアムの子どもたちから「日本大使館とやらへ行きたい！」という声が頻繁に聞かれるようになったのはおまけ？

8月19日―鶏を飼い始める－「鶏小屋を作ったから、鶏を飼いたい。」という声に早速知人に依頼、行ってみるともうほとんど成鳥になった鶏。それでも良いというので、雌3羽、雄1羽を購入。翌日様子を見に行くと「昨日卵を産んだ！」と興奮気味に報告する子どもたち。最初の卵は敬意を表して小林監督に進呈。黄身の黄色いとても良い卵でした！

追伸：「ウサギも飼いたい！」という子どもたちに少々押され気味の今日この頃です。　　松下

スティーブン（右）とブグワ

にわとりと

次郎と

ストリートの子どもたちへの支援活動

ストライキ

8月21日（月）午前9時前、いつものようにスタジアムへ。もうすでに数人の子どもたちが集まっています。私はオフィスに行きいくつかの用を終え、外に出てみると子どもたちが寝そべっています。既に9時半を過ぎ、通常なら勉強を始めている時間なのに。

どうして子どもたちが外に？　スタッフに聞いてみると「ストライキ中！」とのこと。一瞬「？」「ストライキ中？」「どうして？」「何があった？」と子どもたちに問いただしました。首謀者？のジョセフ・マウラ（14才・路上歴？1年9ヶ月・逮捕歴？回のつわもの）が言うには「先週、警察に逮捕されたジュリアスは受け出しに行ったのに、今、留置場に入れられているピーターを何故迎えに行かないのか。俺の時にも来てくれなかった！　ピーターを受け出すまでストライキをする！」との宣言です。

「モヨの基本的としては、家族に知らせるが、モヨとしては迎えに行かない。ジュリアスの場合は母親が何処かに出かけて留守だったので迎えに行った。ピーターの場合は母親に知らせ、スタッフを付けて一緒に警察に行き、金曜日に釈放された筈。皆がストライキをするのは一向に構わないが、母親からの依頼がない限り迎えに行くつもりはない。」と説明しても納得せずストライキ続行。そのうちに時間が過ぎ、勉強時間は終わり、サッカーの時間になると一人また一人と脱落者？が続出してきました。そしてサッカーの魅力にたまりかねて、ついにマウラも脱落してしまいました。

スタジアムにて（中央マウラ）

あえなくストライキは自然解散となりましたが、その後も何かにつけ子どもたちを扇動（？）したり、時には子どもたちを引き連れてこれ見よがしにビデオ劇場へと向かうマウラとのこぜりあいが続いています。14才とは言え、弁が立ち、お金を稼ぐのも上手く、したたかではあるけれど何故だか魅力的な彼と、他の子どもたちも巻き込んでの駆け引きが当分続きそうです。

一方、ストライキの原因になったピーターはというと、金曜日には釈放されず、その後私も母親と警察へ同行し、一緒にピーターを受け出しました。

そして、ストリート・チルドレン狩りをしては留置、釈放を繰り返す警察と、一向に懲りないで逮捕されることに慣れていくだけの子どもたちのいたちごっこは今も路上で繰り返されています。根本的な解決策は？と悩む日々です。

松下

ティカ訪問記

私が松下さんに初めてお目にかかったのは去年の５月、ケニア日本人会婦人部の総会のとき。その後2回ほどお目にかかって直接お話するようになり、松下さんから是非ティカに遊びに来てくださいとおっしゃっていただいて、とうとうその機会を得た。

6月20日、日本から遊びに来た私の両親と他6名でティカを訪問した。私の目的はふたつ、ひとつはサファリだけではなく、ケニアの現実を両親に見せたかったこと、もうひとつは私が支援して学校に行っている子どもに会うことだ。

松下さんの活動拠点のひとつのスタジアムで松下さんと合流、早速、いろいろなお話をお聞きした。そこで本来なら学校に行くべき子どもたちが古くなったボールでサッカーをしている。松下さんたちが町を歩き「リクルート」したストリートチルドレンだ。彼らのほとんどが吸っているシンナーを彼らから遠ざけることがまず更正の最初。スタジアムの中ではシンナーは吸わないというのが松下さんとの間での約束だ。彼らにシンナーをやめさせ、学校に行くことが出来るようになるまでの道のりはなかなか厳しい。

車で移動し、スラムとその中にある小学校、新しい家の子どもたちが通う小学校も訪問した。支援した子どもに会えたのはなによりうれしかったが、スラムは電気もガスも下水道も整備されてなくて不衛生、学校は先生のトイレがグランドの真ん中にあったり、町がくみ取りに来てくれなかったり、生徒数が少なめで予算の確保が難しかったり、給食の支給をどうするかなど問題山積み。それでも、そのひとつひとつに真摯に取り組む松下さんの姿に本当に頭が下がる思いだ。

センターの建設予定地にも行った。松下さんには子どもたちが安心して楽しくすごしている風景が見えていただろう。完成の報告は帰国してからだろうが、私も楽しみだ。

ナイロビで暮らし、松下さんの活動をじかに見ることが出来る数少ないものとして、日本から松下さんを支援されているみなさんになにかをお伝えできたらと思い、今回、寄稿しました。またの機会に「その後」のご報告ができればと思います。

ナイロビ在住　大石　祐佳里

ドキュメンタリー映画

「空腹をわすれるために（仮題）」撮影はじまる。

監督 小林 茂

「ギブ、ミー、テン」（10シリングをくれ）。「バイ、ブレッド」（パンを買ってくれ）。ストリートで暮らす子どもたちから声がかかる。東京だけで1日50万食分が捨てられるという飽食の日本から来たやわな身体と精神が悲鳴をあげるのに、そう時間はかからなかった。シンナーを口から離さない子どもたちの泥酔したような目が追いうちをかける。テルさんは、ここティカの町で「子どもたちの今を映画に」という。サッカーに興じている姿は、油ぎったボロ服をのぞけば、どこにもいる無邪気な子どもたちだ。しかし、配られた半斤のパンにむさぼり食う、あるいはゆっくり大事そうに食う姿に、「貧困」などという論理はどこかへふきとんでいく。何をしに、何を見るために、私はケニアへやってきたのか。私自身の足もとが揺らいでいる。―6月23日、スタッフの吉田泰三と紙芝居の今井和江（2週間滞在）とティカに到着。11月中旬帰国予定―

撮影風景

ケニア・ア・ラ・カルト ⑨

ケニアの世界遺産

ケニアの世界遺産は、3ヶ所あります。まず「ケニア山国立公園」で 1997 年に自然遺産として登録されました。ケニア山の中腹から頂上にかけて珍しい高山植物が群生し、貴重な植物の宝庫となっています。次は「トゥルカナ湖の国立公園郡」で 1997 年に自然遺産として、2001 年に拡大登録されました。多くの鳥類が生息し、砂漠環境での珍しい動植物の生態も観察できます。最後に「ラム旧市街」は 2001 年に文化遺産として登録されました。ラムとはインド洋に浮かぶ小さな島で、数百年にわたってヨーロッパ、アラブ、インドなどさまざまな文化の影響を受け、独特のスワヒリ文化が生み出された所です。しかし、残念ながらこの 3 ヶ所は交通の便の問題などから、いわゆるポピュラーなケニアツアーには含まれていません。（高橋）

お知らせ

松下照美の次回日本帰国は１１月１４日～１２月１６日の予定です。

モヨ・チルドレン・センターの歩み

1997 年 11 月 / ケニア政府大統領府 NGO ビューロー・インターナショナル　NGO 登録の申請書類提出。
1999 年 9 月 / ケニア政府より国際 NGO として「モヨ・ホーム」正式に認可・登録される。
2000 年 10 月 / ティカにて、本格的に活動開始。
2001 年 5 月 /「モヨ・ホーム」から「モヨ・チルドレン・センター」に改名。
2004 年 4 月 /「モヨ・チルドレン・センターを支える会」発足。

「モヨ・チルドレン・センターを支える会」会員募集

お一人でも多くの方に、一社でも多くの法人にご入会いただき、当センターを支えて頂ければ幸甚です。

		年会費	
		個人会員	法人会員
①正会員	日本	6,000 円	20,000 円
	ウガンダ・ケニア	4,000KSH	13,000KSH
②賛助会員	日本	3,000 円	3,000 円
	ウガンダ・ケニア	2,000KSH	2,000KSH

経過報告（2006年8月31日現在）
正会員：日本51名（8名増）・ケニア8名（4名増）計59名
賛助会員：日本50名（15名増）・ケニア0名（1名減―正会員へ移行）計50名
特別会員：日本41名・ケニア2名・法人3社　計43名・法人3社
総会員数：個人152名・法人3社

■「支える会」よりお願い
郵便振替用紙を同封させて頂きました。通信欄にはコメントと共に会費・年度・寄付等詳細をご記入ください。皆様からのご協力を心よりお願い致します。

■「支える会」会費 / 寄付受付先
口座名：モヨ・チルドレン・センターを支える会
代表者：高塚政生※郵便振替口座番号 :01660-1-73996

■お知らせ
ホーム・ページただいま作成中！
http://moyo.jp/

編集後記

◎小林監督・吉田カメラマンが来られて早や三ヶ月余り。お二人から教わることの多い日々です。（テル）
◎先日エチオピアへ行ってきました。ケニアより過酷でした。でもラリベラの教会は素晴らしかったです。（優香）
◎夏に息子（10歳）が富士登山に挑戦しました。でも7合目でギブアップ。海抜0mからの登頂はきつかったようです。（英）

モヨ・チルドレン・センター●ケニア政府 NGO 局登録番号：OP.218/051/97223/1006
P.O.BOX 2712　THIKA　KENYA　TEL/FAX：254(ケニアの国際番号)-067-22329　E-MAIL：moyo@africaonline.co.ke
モヨ・チルドレン・センターを支える会●〒 799-0702 愛媛県四国中央市土居町小林 1785 － 1　高塚政生方
TEL/FAX：0896-74-7920　携帯電話：090-11715632　：E-MAIL ／ tmasao@d1.dion.ne.jp
■これまでのモヨ・チルドレン・センター日本支部は「モヨ・チルドレン・センターを支える会神奈川支部」になりました。
連絡先はこれまで通り　〒 211-0011 神奈川県川崎市中原区下沼部 1916　青木康子：TEL/FAX：044-433-3447